

ドライデンの‘Baucis and Philemon’

——“nor once look backward in your Flight”の意味を巡って——

高 谷 修

1. 問題の所在

1688年の名誉革命によって、ジョン・ドライデン（John Dryden, 1631-1700）が桂冠詩人（Poet Laureate）の地位を奪われ、王室修史官（Historiographer Royal）の職をも剥奪されたことはよく知られている。このような政治的な変動により生計の途を閉ざされた彼は、劇作に活路を見出そうとする一方で、また古典の翻訳にも精力的に励んだ。そして、このような状況下で、彼の晩年の翻訳の傑作であるウェルギリウス翻訳が出版されたのであった。たとえ経済的な安定を得ることが、翻訳の第一の目的であったにせよ、その出来栄は、桂冠詩人の名に恥じないものであるといつてよいだろう。

そして、彼の死の年には、最晩年の傑作ともいえる『古今説話集』（*Fables Ancient and Modern*, 1700）が出版されるのである。この作品は、ギリシア・ローマの古典作品の翻訳や、またイギリスのチョーサー（Geoffrey Chaucer, ?1340-1400）の改作などを含む、翻訳・翻案集といった趣がある作品集である。古典の方から紹介すれば、ギリシアからはホメロス（『イリアッド』第1歌）が選ばれ、ローマからはオウィディウス（Publius Ovidius Naso, 43 BC - AD 18）

が8編選ばれている。そしてそれらは、すべて『変身物語』*Metamorphoses* から選ばれている。(その他、ボッカチオ (Giovanni Boccaccio, ?1313-1375) の『デカメロン』からの翻訳などがあるが、ここでは触れない。)

さて、8編のオウィディウス翻訳の中に、「ボーシスとフィリーモン」‘Baucis and Philemon’の物語がある。オウィディウスの『変身物語』第8巻(611行—724行)において語られる物語がドライデンの翻訳の原典である。この原作の内容を手短に紹介すれば、以下のようになるであろう。

イクシーオーン Ixion の息子ピーリトウス Pirithous は、神々に事物や人間を変身させる力があると信じている者は愚か者だと述べ、神々の力を蔑む。それに対して、分別もあり年齢も熟しているレレクス Lelex は、神々の力は広大無辺だと説き、その例としてパウキスとピレーモンの例を挙げる。この二人の夫婦はプリュギア Phrygia に暮らしていた。そこへユピテルとヘルメースが微行する。彼らは多くの家の戸口に立ったが、誰も彼らを招じ入れない。ただパウキスとピレーモンだけが彼らを二人の東屋でもてなすのである。神々は二人から貧しいながらも精一杯の歓待を受け、そして自らの正体を明らかにした後で、以下のように宣言するのである。不敬なる者達は罰を受けさせるが、老夫婦だけは命を助けてやる、よって直ちに丘の上へと逃げよ、というのである。そして、彼らが頂の近くまで近づいた時、振り返ると、彼らの東屋は神殿に変わり近隣は沼沢地に変えられている。二人は隣人の運命を嘆くが、神から今後の希望を尋ねられて、神殿の宮守となり、また二人が同時に死ぬことを求める。その希望は認められる。そして、時が来たときパウキスは菩提樹に変身しピレーモンは樅の木に変わり、二つの木は隣り合って現在も立っている。このような話をレレクスは話すのである。

この話は『変身物語』第8巻の611行から724行を構成し、114行からなっている。この話をドライデンは199行の話に拡大している¹。長短短調6歩

1 オウィディウスの原典は長短短調6歩格 (dactylic hexameter) ——要するに叙事詩の韻律——であるが、ドライデンは、弱強調5歩格 (iambic pentameter) で、

格と弱強調 5 歩格という違いは無視することにして、単純計算すると、ドライデンは約 1.7 倍に拡大していることが分かる。彼の翻訳の様式は彼自身の翻訳の 3 分類説に照らし合わせれば、paraphrase であるということができよう²。ドライデンの翻訳の特徴は、大筋においてオウィディウスの原典を尊重しながらも、多数の解説的な言辞を付加するような様式を採用していることである。このような様式は他の翻訳においても度々見られることであり、さして驚くべきことではない。

さて、本論文が注目するのは、ドライデンが書き加えた、原典にはない一行に巡ってである。先に述べたように、神ユピテルは不敬なる近隣の者達を罰するがパウキスとピレーモンの二人は助けようという。そして二人に山に逃れよ、という。そして「われわれの歩みに付き従い、急いで逃げよ」という。原典においては、ただそれだけである。しかし、ドライデンの英訳においては、山に逃れよ、と命じた後で神は「そして逃げる途中に決して後ろを振り向くな」‘nor once look backward in your Flight’ (l. 146)³ という命令を付け加えるのである。この一行は原典にはない、ドライデンの付加である。

善行を行ったものが神（又はその様な存在）から褒美を得るという話は古来、洋の東西を問わず存在する。例えば謡曲の『鉢木』⁴などに見られるように、わが国にも同様の話がある。旅人を暖かくもてなす信心深い者が褒賞を得る、という因果応報の見地からすれば、パウキスとピレーモンが救われるのは当然のことであり自明である。それ故に、この「後ろを振り向くな」という命令は無意味で

↘ 訳している。

2 W.P.Ker, ed., ‘Preface’ to the Translation of Ovid’s Epistles’, *Essays of John Dryden*, vol. 1 (Oxford University Press, 1926), p. 237.

3 Vinton A. Dearing, ed., *The Works of John Dryden*, vol. VII (University of California Press, 2000), p. 242. 以下、ドライデンからの引用はカリフォルニア版に拠る。

4 田中允『謡曲』現代語訳日本古典文学全集 22、河出書房、昭和 29 年、「鉢木」174 - 197 頁参照。

ある、という解釈も成り立ちうるように思われる。Eric Rothstein は、「この命令はドライデンの詩ではなんら機能を果たしていない、ロトの物語を思い出させるものとして以外には。」と述べている⁵。しかし、本当にそうであろうか。この神の命令はなんら機能を果たしてはいないであろうか。仔細に検討してみれば、また違った見方もできるのではなかろうか。何故ドライデンはこの一行を書き加えたのか、この一行はどのような意味をもっているのか、またどのような機能を果たしているのか。それを探ることが本論文の目指すところである。

2. オウィディウスの原典とドライデンの英訳

まず最初にオウィディウスの原典を確認することからはじめることとした。先に述べたように、神の力の無限さを否定するピーリトゥスに対して、敬虔なるレレクスは次のように述べる。

‘Inmensa est finemque potentia caeli
non habet et quidquid superi uoluere peractum est.
quoque minus dubites, tiliæ contermina quercus
collibus est Phrygiis, medio circumdata muro. 618-621⁶

5 ‘a command that has no counterpart in Ovid and no function in Dryden’s Poem, except as a reminiscence of the story of Lot.’ Eric Rothstein, ‘Jonathan Swift as Jupiter: “Baucis and Philemon”’ Henry Knight Miller, Eric Rothstein and G.S. Rousseau, eds., *The Augustan Milieu, Essays Presented to Louis A. Landa* (Oxford: Clarendon Press, 1970), p. 210. Eric Rothstein の発言の重点は勿論、前半部にある。しかし、後半部のロトの物語に対する指摘も極めて重要であるように思われる。この点については後で触れたい。

6 R J Tarrant, ed., *P. Ovidi Nasonis Metamorphoses*, Oxford Classical Texts (Oxford: Clarendon Press, 2004), p. 239. 以下オウィディウスからの引用はこのOCT版を用いた。当時のオウィディウスのテキストについては、1661年以降 Nicklaas Heinsius 編集のもの(1652)が標準的なテキストであったようだ。ノ

(神の力は無限で限りはない。そして何でも神が望み給うことは成就されるのだ。お前がそれを疑わないように、フリギアの丘にあり、中くらいの囲いに囲まれた、菩提樹に隣接する櫨の木 [の話をしよう]。)

まず、レレクスは、神の力が無限であり、神が望むことは何であれ実現することを証明するためにバウキスとピレーモンの話を始めるのである。つまり不信心なピーリトウスに、神の力の広大さを説くために、その証明をしようというのである。レレクスは、その木の場所を自分でも見た、'ipse locum vidi' (l.622) といって、事の真实性を強調する。最後になって、この菩提樹と櫨の木はバウキスとピレーモンが変身したものであることが分かるが、バウキスとピレーモンは次のように描かれる。

... pia Baucis anus parilique aetate Philemon

illa sunt annis iuncti iuuenalibus, illa

consenuere case ...

631-633

(信心深いが年老いているバウキスと、同じくらいの年齢であるピレーモ

、 Cornelius Schrevelius や Borchard Cnipping, また Daniel Crispinus らによる注釈付きのラテン語テキストは Heinsius に依拠していた。see Eric Rothstein, p. 208 n. ドライデンは *Ovid's Epistles* (1689) の序文において、Heinsius に言及しており、当然この Heinsius 版を知っていた (James Kinsley ed., *The Poems of John Dryden*, vol. 1, Oxford, Clarendon Press, 1970, p. 181). J. McG. Bottkol はドライデンが Cnippings の版を主に用いたであろうと述べている。J. McG. Bottkol, 'Dryden's Latin Scholarship' H.T. Swedenberg, Jr. ed., *Essential Articles for the study of John Dryden* (Frank Cass and Co., 1966), p. 400 参照。また Eric Rothstein も同じ意見である (Eric Rothstein, p. 210)。なお Earl Miner 氏は、1696 年に Oxford から出版された the Dauphin (or Delphin) edition を用いた可能性に注意を喚起している。Earl Miner, 'Ovid Reformed: fables, morals, and the second epic' Earl Miner & Jennifer Brady, eds, *Literary Transmission and Authority, Dryden and Other Writers* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993), p. 85. Heinsius 版も Dauphin 版も筆者は未見。

ンがその家において若い頃に結婚し、その同じ家で年をとっていた。)

文法的には pia はバウキスだけに係っており、parili aetate とあり等しいのは年齢ということになるが、いうまでもなく、敬虔さにおいてもピレーモンはバウキスに等しいであろう。彼らはこのように、神を敬う二人であり、貧しい家において共に年老いた二人である。

神々は多くの家 (mille domos) を訪ねるが、それらの家には錠が掛かっている。他の多くの家が拒んだユッピテルとヘルメースを、敬虔な二人の老人は暖かく迎え入れる。そしてピレーモンは椅子を差し出し体を休めるようにいう。またバウキスは、それに粗末な覆いをかけ、また炉で火を起こそうとする。バウキスは anima … anili (l.643)「老人の息を吹きかけて」火を起こすのだが、実に微笑ましい印象を与える。そして、粗末ではあるが色々な食べもので神々を歓待する。夫は水もよく撒かれた菜園でとれたキャベツ (riguo collegerat horto/ truncat holus foliis, ll. 646-647) 用意し、また梁から燻製の豚肉の背肉を二股の棒で下ろす。

敬虔な二人の様子には可笑しさを誘う描写もある。食事を用意するバウキスは次のように描かれる。

... mensam succincta tremensque

ponit anus, mensae sed erat pes tertius impar; 660-661.

(裾を絡めて震える手つきで、老女は食卓を置くが、食卓の3つ目の脚は不揃いだった。)

年老いたバウキスが老体を励ましながら食卓を用意する様が実に微笑ましい。ま

7 William S. Anderson のテキストでは、631 行目は ‘sed pia; Baucis anus pariliue aetate Philemon’ となっており、pia は前行の tecta (家) を指すことになる。が、この解釈はとらない。Cf. William S. Anderson, *Ovid's Metamorphoses*, Books 6-10, (University of Oklahoma Press, 1989), p. 98.

た食卓の脚が不揃いで、傾いている様もまた笑いを誘う。しかし、その短い一つの脚に陶器の欠片をあてがって高さを正し (testa parem fecit l.662)、それから貧しいながらも色々な食べ物を用意する。オリーブの実や糟漬にした秋の山ぐみや、キクヂシヤ、大根、それにチーズに、あまり熱くない火で焼かれた卵などが並べられる。そして、殆ど同時に温かい料理も用意される。そして、葡萄酒も出されるのだが、それは勿論高級な葡萄酒ではない。‘nec longae rursus referuntur uina senectae’ (l. 672) 「あまり長く時を経たものではない葡萄酒がまた運ばれる」のである。そして何より強調されるのは、老人夫婦の善意である。

super omnia uultus

accessere boni nec iners pauperque uoluntas. 677-678.

(全てにまして、親切な顔と暖かく物惜しみしない善意が加わった。)

このような善意の二人に神は報いるのである。自らが神であることを認めた後に、近隣の人々には罰を宣言する一方で、善良な二人には直ちにこの家から去るように命じる。その様は以下のように描かれている。

modo uestra relinquitte tecta

ac nostros comitate gradus et in ardua montis

ite simul. ” parent ambo baculisque leuati

nituntur longo uestigia ponere cliuo.⁸ 691-694. (下線は筆者)

(「直ぐに、お前たちの家を去りなさい、そしてわれわれの歩みに付き従い、山の頂へと共に行くのだ!」 二人は命令に従い、杖に助けられて、長い

8 OCT 版では 693 行目については以下の二つの Version を併せて、三種類のテキストが併記してある。

[ite simul. ” parent et dis praeceuntibus ambo 693a

membra leuant baculis tardique senilibus annis] 693b

a 版では神が先に立って導く様が強調されるとするなら、b 版で強調されるのは老年であろうか。

斜面に足跡を残しながら進む。)

神はこのように語り彼らを促し、老夫婦は杖に寄りかかりながら、ゆっくりと山へと逃れる。693 行から 694 行にかけては、spondee（長長調）がやや多く使用されている（*parent ambo baculisque leuati nituntur longo uestigia ponere cliuo.*）。それは勿論、ゆっくりと進むさまを活写しようとする意図から出たものであろうことはすぐに気づくことである。

さてこの部分のドライデン訳を見てみると、次のようになっている。

but obey

With speed, and follow where we lead the way:

Leave these accurs'd; and to the Mountains Height

Ascend; nor once look backward in your Flight. 143-146.

（急いで命令に従いなさい、そしてわれわれが導くところへ付き従いなさい。これらの忌まわしいものを後にして、山の頂へと上りなさい。そして逃げる途中に決して振り返ってはなりません。）

上の引用の最後の行 ‘nor once look backward in your Flight’ 「そして逃げる途中に決して振り返ってはなりません」という部分が原典にはないことは既に指摘した通りである。このような文脈で、ドライデンは「そして逃げる途中に決して振り返ってはなりません」という一行を付加している。

老夫婦は神の命令を忠実に守り、途中で後ろを振り返ることはない。そして山の頂近くに来た時に、——正確には ‘quantum semel ire sagitta missa potest’ 放たれた矢が届くことができるほどの距離に来た時に——初めて二人は振り返り（*flexere oculos*）彼らの家を眺めるのだが、そこは既に沼沢地と化しているのを見出すのである。

3. Orpheus と Eurydice の物語

後ろを振り返ってはならない、という命令を受けながら急な坂道を登る物語として、読者の脳裏には殆どすぐに、オルペウス Orpheus とエウリュディケー Eurydice の物語が浮かぶであろう。エウリュディケーは草原を散歩している時に、踵を蛇にかまれて死亡してしまう。最愛の妻エウリュディケーを亡くしたオルペウスは地獄をたずね、地獄の王プルートー Pluto に妻を返してもらうように嘆願する。歌の名手であるオルペウスが弦に合わせて巧みな歌で懇願すると、地獄の王もみな涙を流し彼の懇請を許し、エウリュディケーを地上に連れ戻すことを認めるのであった。その件をオウィディウスは『変身物語』(第10巻)で以下のように語っている。

tum primum lacrimis uictarum carmine fama est
Eumenidum maduisse genas; nec regia coniunx
sustinet oranti nec qui regit ima negare,
Eurydicenque uocant: X, 45-48

(その時初めて歌に打ち負かされてエウメニデスは涙で頬を濡らしたという。また王の奥方も、地獄を支配する王も嘆願者を拒むことはできず、エウリュディケーを呼び寄せた。)

エウリュディケーはまだ傷が癒えず、ゆっくりとしか歩けないのであるが、ともあれオルペウスは妻エウリュディケーを連れ戻すことを許されるのである。しかし、それには条件が付けられていた。つまり、地上に戻るまで後ろを振り返ってはならない、というものだった。そのことは上の引用に続いて以下のように語られる。

hanc simul et legem Rhodopeius accipit heros,

ne flectat retro sua lumina, donec Auernas
exierit ualles; aut inrita dona futura. X, 50-52.

(彼女と一緒に命令もロドペーイオスの半神 [オルペウス] は受け取るのだ、アウエルヌスの谷を出るまでは眼を後ろに向けてはならない、さもないと贈り物は無駄になるだろう、と。)

この命令は勿論守られないのだが、その様は実に説得力をもって語られる。オルペウスの後ろを振り向かずにはおられない心情は実に巧みに描かれている。以下の如くである。

Carpitur accliuis per muta silentia trames,
arduus, obscurus, caligine densus opaca.
nec procul abfuerunt telluris margine summae; 55
hic ne deficeret metuens audisque uidendi
flexit amans oculos, et protinus illa relapsa est,
bracchiaque intendens prendique et prendere certans
nil nisi cedentes infelix adripit auras. X, 53-59. (下線は筆者)
(沈黙の中を、上り坂の道がとられるが、その坂は急峻で暗く、また不透明な霧によって覆われている、彼らは地上の縁から遠くない場所にやって来ていた。ここで、(彼女が) 疲れてはいないかと心配し、また見たいと望み、愛するあまり目を後ろに向けた。すると直ぐに彼女は退いて行った、腕を伸ばし (夫に) 掴まえられ、また (自らも) 掴まえようともがくが、不幸にも、消え去る空気以外には何も掴まえられなかった。)

ここには、妻を思いやるオルペウスの実に暖かい気持ちが表されている。後ろを振り返ってはならない、という命令にも拘らず、つい振り返ってしまうオルペウスの心情が巧みに表現されており、彼の行動の軽率さは非難されるよりも、寧ろ彼に対する同情を呼び起こすであろう。

さて、ここで注意したいことは、上の引用に現れるオウィディウスの言葉遣いである。『変身物語』の第8歌 (パウキスとピレーモン) においても、第10

歌（オルペウスとエウリュディケー）においても、——後者においては、上る道は地獄から地上への道である、という点に相違があるが——彼らが歩む、頂へ（*summa*）の道は傾斜して（*acclivis*）おり、険しい（*arduus*）のである。要するに、同じような道をこの二組の夫婦は辿るのである。そしてオルペウスは振り返ってはならぬという命令を守らなかった故に、頂に至ることはできないのである。また、目を後ろに向けるという表現にも類似性が認められる。「二人が頂から矢を射れば届く距離に着いたときに」*tantum aberant summo quantum semel ire sagitta missa potest* (695-696) バウキスとピレーモンは振り返って彼らの家や近隣の者たちが沼に沈むのを見るのだが、「振り返った」には同じラテン語表現が使われている。二人は ‘*flexere oculos*’ したのだが、オルペウスも ‘*flexit oculos*’ するのである。

バウキスとピレーモンの物語を翻訳していた時、ドライデンの頭の中には、このオルペウスの物語を連想していた、と考えてもなんら不都合はないように思われる。オルペウスは、意識的にではないにしても、命令に背いてしまい、結局は事を成就することができない。ドライデン版において、レレクスからバウキスとピレーモンの物語を聞いている聴衆（または読者）は、‘*nor once look backward in your Flight*’ 「そして逃げる途中に決して振り返ってはなりません」という命令から、殆ど間違いなくオルペウスを連想したであろう。バウキスとピレーモンの話をするレレクスの意図は、神々の力の廣大無辺さを語るためであった。それ故に、神の命令を守らなかったバウキスとピレーモンがその罰として、オルペウスと同じように、結果的に不幸を味わうという展開も可能であったであろう。その可能性を意識すればこそ、聴衆はより緊張感をもって、バウキスとピレーモンの話の展開に深く捉えられたに違いない。そのことは想像に難くない。ドライデンがバウキスとピレーモンの翻訳において、この命令を付加することによって意図したのは、同種の緊張感と哀切感を付加することだったといっても誤りではないであろう。オウィディウス原典には段落というものは無かったであろうが、後世の編

者は話の纏まり毎に段落をつけている。OCT 版に於いては、神々が自らの正体を明かすようになる予兆として葡萄酒がどれほど飲み干されても尽きることがないというエピソード（679 行目）から新しい段落が始まっている。ドライデンもまたそのエピソードから新しい段落としている。しかし、OCT 版においては段落はバウキスとピレーモンの話の最後まで続くのだが⁹、ドライデンにおいては、その段落はこの ‘nor once look backward in your Flight’ という一行で一応の終わりを見る。しかも、この行の後には印刷上一行の空きが置かれているのである¹⁰。このような印刷上の工夫は勿論この緊張感を高める効果を意図したものであろう。ドライデンが原典にはない ‘nor once look backward in your Flight’ という一行を書き加えた理由の一部には、オルペウスとエウリュディケーの物語との文脈的な関連を想起させ、それによって同種の緊張感を醸成のすることにあったと思われるのである。このような印刷上の工夫の意図を勘案する時、この神の命令がなんら機能を果たしていないとは到底思われないのである。

4. 旧約聖書および Dante の「煉獄」

カリフォルニア大学から出版されているドライデン全集のうち、1697 年から 1700 年の間に出版されたドライデンの詩を扱う第 7 巻は、2000 年に Vinton A. Dearing 教授の編集により出版された。990 ページを数える大部な巻であり注も充実している。そして、注は多くを教えてくれる。例えば、ドライデンが翻訳に際して、ドライデン以前の George Sandys (1578-1644) の英訳¹¹を利用

9 Loeb 版も OCT 版と同様の段落分けをしている。しかし Anderson はまた違っている。彼はバウキスとピレーモンの物語全体 (611-724) を一つの段落としている。

10 Vinton A. Dearing, ed., *The Works of John Dryden*, vol. VII, p. 242.

11 George Sandys はオウィディウスの「変身物語」の英訳を 1626 年に発表している。現在 Kessinger Publishing 社のリプリント版で容易に読むことができる。

していることなども、注は教えてくれる。またこれによってドライデンが旧約聖書を利用している箇所があることも分かる。この旧約聖書との関係は意外に重大な意味を持っているように思われる。

バウキスとピレーモンは、微行する神を暖かく迎え入れ歓待することは既に述べた。その際に老夫婦が極めて細やかな心配りを見せることも述べた。以下の描写はそのような細やかな心配りの一端を示している。

A Beam there was, on which a Beechen Pail
Hung by the Handle, on a driven Nail:
This fill'd with Water, gently warm'd, they set
Before their Guests; in this they bath'd their Feet, } 75
And after with clean Towels dry'd their Sweat: } 72-76.

(梁があり、それにはブナの桶が取っ手によって、打たれた釘に、掛かっていた。これに穏やかに温められた湯が満たされ、彼らは客人の前に差し出した。これで彼らは足を洗い、そして清潔な布で水気をとった。)

この5行は、多くの家を訪ねたが歓迎されなかった神々を貧しいバウキスとピレーモンは暖かく迎え入れて遇したという部分だが、これに対応する部分は実は原文にはない。神々に脚を洗ってもらうべくお湯を差し出すという部分はオウィディウスにはないのである。そして、カリフォルニア版の注は、ドライデンが旧約聖書から着想を得ていることを教えてくれる。

それは、「創世記」第19章のロト Lot の話である。その話は以下の如くである。神のみ使いは夕暮れにソドムに着く。その箇所は、欽定訳聖書では次のように描かれる。‘And there came two angels to Sodom at even; and Lot sat in the gate of Sodom: and Lot seeing *them* rose up to meet them; and he

↘ George Sandys, *Ovid's Metamorphosis Englished, Mythologized and Represented in Figures* (1632), 1626, rev. 1632.

bowed himself with his face toward the ground;’ (第 19 章第 1 節)¹² 「そのふたりのみ使いは夕暮れにソダムに着いた。そのときロトはソダムの門にすわっていた。ロトは彼らを見て、立って迎え、地に伏して」¹³ いうのである。そして、問題の箇所がくる。ロトは彼らを迎え、家にはいり「足を洗い」そして泊まるようにいう。その箇所は次のようである。‘And he said, Behold now, my lords, turn in, I pray you, into your servant’s house, and tarry all night, and wash your feet, and ye shall rise up early, and go on your ways.’ (第 19 章第 2 節) (言った、「わが主よ、どうぞしもべの家に立寄って足を洗い、お泊りください。そして朝早く起きてお立ちください」。)

このように、神の身使いを歓待し、まず足を洗うように促すという行為の背後には、以上見たように「創世記」の挿話が典拠として存在しているのである。この点を忘れてはならないように思われる。パウキスとピレーモンが訪れてきた二人の神に足を洗うように促すのは、まさにこのような聖書との類似性を暗示するためであろう。ドライデンは密かに聖書的な背景を人物の背後に滑り込ませていると思われるのである。そして更に、またこのロトの挿話において、‘nor once look backward in your Flight’ ということばも見られることは注目に値する。神はソダムを滅ぼそうと決め、そしてロトとその家族だけは助けようという。神のみ使いはロトを促していう、‘And it came to pass, when they had brought them forth abroad, that he said, Escape for thy life; look not behind thee, neither stay thou in all the plain; escape to the mountain, lest thou be consumed.’ (「創世記」第 19 章 17 節、彼らを外に連れ出した時そのひとは言った「のがれて、自分の命を救いなさい。うしろをふりかかって見てはならない。低地にはどこにも立ち止まってはならない。山にのがれなさい。

12 Robert Carroll and Stephen Prickett eds., *The Bible, Authorized King James Version* (Oxford University Press, 1977), p. 19. 以下、聖書からの引用はこの版に拠る。

13 日本語訳は、日本聖書協会『聖書』1975 年に拠る。以下も同様。

そうしなければ、あなたは滅びます。』)

このようなドライデンの加筆から容易に推測できることは以下のような点である。ドライデンは、まず「足を洗う」という、原典にはない行為を翻訳の中に挿入する。そして「創世記」のロトの挿話を読者に想起させようとする。そして、「足を洗う」という言わば前触れののちに本題である「後ろを振り返ってはならない」という命題を付け加えるのである。筆者は先に 26 ページにおいて、Eric Rothstein が、後ろを振り返るな、という神の命令は「ドライデンの詩ではなんら機能を果たしていない、ロトの物語を思い出させるものとして以外には」と述べていることに触れた。Rothstein の発言は神の命令が全体の話の中で、なんら機能していないということを寧ろ強調するものであった。しかし、図らずも彼が指摘したように、実はこの命令は聖書のロトの話を読者に思い出させるために、その為に書き込まれている、というべきではなからうか。そして、このようなドライデンの加筆によってオウィディウスの翻訳は聖書的な風味を加えられ、キリスト教的な文脈に移し変えられるのである。この点は忘れてはならない。ギリシア・ローマの異教的な話を訳しながら、それをキリスト教の話に置き換えようとしているのである。

ドライデンは僅かな加筆によって聖書的な文脈を作り出そうとしているが、同じような心性は、聖書の同じ箇所を典拠とする、ダンテの「煉獄」を検証することによって更に明らかとなるように思われる。ウェルギリウス（イタリア名 Virgilio, ヴィルジリオ）に導かれて地獄を通り抜けたダンテは、煉獄の島に辿り着く。そして、この煉獄の山を登り始める。麓において斜面は険しく登山は容易ではない。しかし、彼は苦勞に苦勞を重ねながら、上るのである。煉獄の前域を登り終え、そして遂に煉獄の本域に入ることができる。三段の階段の上の煉獄の入り口には天使が座しておられる。若干の問答の後にダンテとヴィルジリオは門を通ることが許される。その時、ダンテの額には 7 つの P の文字が刻まれる。（P は Peccato 罪を意味し、ダンテが環道を一段上るごとにその額から一つずつ消えてゆく。）そして、天使はダンテとヴィルジリオがまさ

に煉獄の門を越えようとする時に、二人に向かい次のようにいうのである。

Poi pinse l'uscio a la porta sacrata,
dicendo: “intrate; ma facciovi accorti
che di fuor torna chi 'n dietro si guata.” IX, 130 -132¹⁴ (下線は筆者)
(そして天使は、「入れ、しかし、私はお前達に注意するが、後ろを振り返る者は(門の)外に戻ることになる」といって、聖なる門の入り口を押した。)

要するに天使は、後ろを振り返ると煉獄の先に進むことはできず、門の外に引き戻されてしまうぞ、と警告を発するのである。そしてこの表現の背後には、また「創世記」があるのである¹⁵。ダンテが門を入るときに「神よわれらは汝を賛美す」Te deum laudamus (1.140) という賛美歌が聞こえるような気がするのであるが、ある種の恍惚感を感じながら敷居を越えて煉獄に入るダンテは、背後で門がしめる音を聞く。同時に彼は次のような感慨を持つ。

Poi fummo dentro al soglio de la porta ...
sonando la senti' esser richiusa;
e s'io avesse li occhi volti ad essa,
qual fora stata al fallo degna scusa? X, 1, 4 - 6.

(それからわれわれは門の敷居を越えて中に入った... 私は門が音をたてて閉じられるのを聞いた。そしてもしも目をその方に向けていたら、その過失を償うに値するような、どのような言い訳がありえただろうか?)

14 Charles Singleton, ed., *The Divine Comedy of Dante Alighieri: Purgatorio, Text and Commentary* (Princeton University Press, 1982), p. 94. 以下、ダンテからの引用はこの版に拠る。

15 この表現の背後に「創世記」があることは、Singleton をはじめ、殆どの『神曲』の Kommentarij が指摘している。See A cura di Natalino Sapegno, *Dante Alighieri; La Divina Commedia*, la Nuova Italia, 1994. A cura di Tommaso Di Salvo, *la Divina Commedia*, Zanichelli, 1987. A cura di Emilio Pasquini, e Antonio Quaglio, *Dante Alighieri, Commedia*, Garzanti, 1987.

ダンテは敷居を越えて煉獄の本域に入っている瞬間に、もしも天使の命令に背いて後ろを振り返ったならば、どのような言い訳ができるだろうかと思案するのである。無論、言い訳などできるはずはない。ダンテは煉獄に入った後に岩間をよじ登り第一の環道に辿り着く。その環道で見えるものは山腹の大理石に刻まれた様々なエピソードである。それらはすべて「謙譲の美德」を描いている。煉獄の第一の環道では、まず高慢の罪の贖いが行われるのである。ダンテはまず「受胎告知」やダヴィデ王や皇帝トラヤヌスの挿話を絵巻物のように眺める。そして、ダンテが彫刻に見とれている間に、そこへ高慢の罪を償うために岩を背負った人々がやってくるのである。彼らは生前に高慢であったが故に、重い岩を背負い腰を曲げ、頭は上に向けられない状態でやってくるのである¹⁶。この点は示唆的であるように思われる。

ここで強調されているのは、神に従順であることの絶対的な重要性である。ダヴィデ王の挿話は示唆的である。山腹にはダヴィデが聖櫃をエルサレムに運ぶ挿話が刻まれている。それは「サムエル記」下第6章3-7の話である。そのダヴィデのエピソードとは以下のようなものである。ダヴィデは契約の櫃をいれた車を牡牛に引かせてエルサレムに帰ろうとした。‘And they set the ark of God upon a new cart, and brouhgt it out of the house of Abinadab that was in Gibeah: and Uzzah and Ahio, the sons of Abinadab, drave the new cart.’（「サムエル記」下、第6章3-4節「彼らは神の箱を新しい車に載せて、山の上にあるアビナダブの家から運びだした。アビナダブの子たち、ウザとアヒオとが神の箱を載せた新しい車を指揮し、ウザは神の箱のかたわらに沿い、アヒオは箱の前に進んだ。」）ダビデは車の前を歩み喜びで浮かれている。

16 Mark Musa 訳による Penguin 版の表紙には、Luca Signorelli によるこの場面が描かれている。耐え難い重荷を担っている様は圧倒的な印象を与える。Cf Mark Musa, tr. *Dante, The Divine Comedy, vol. II, Purgatory*, Penguin, 1981, rep 1985.

アビナダブの二人の子供のうち、ウザは神の怒りに触れ殺される。以下の如くである。‘And when they came to Nachon’s threshingfloor, Uzzah put forth *his hand* to the ark of God, and took hold of it; for the oxen shook it. And the anger of the Lord was kindled against Uzzah; and God smote him there for *his error*; and there he died by the ark of God.’ (「サムエル記」下、第 6 章 6 – 7 節 (彼らがナコンの打ち場にきた時、ウザは神の箱に手を伸べて、それを押えた。牛がつまずいたからである。すると主はウザに向かって怒りを発し、彼が手を箱に伸べたので、彼をその場で撃たれた。)) ウザは、車に触るな、という神の命令に背いて車に触れたがゆえに、殺された。しかも、それは車に危害を加えるためではなく、むしろ、牛が躓いたがゆえに、支えようとして手を伸ばしたにもかかわらず、なのである。つまり、善意からでも神の意思に背くことになった故に、ウザは死の罰を受けるのである。

このようなダヴィデの聖櫃のエピソードが煉獄の壁には彫られているのである。ウザの挿話は、ダンテの表現を借りれば ‘*si teme officio non commesso*’ (Purgatorio, X, 57) (人が自らに託されていない職分を恐れるように) するために彫られているのである。この大理石に刻まれたエピソードを通して、強調されるのは、神の命令の絶対性と神に従順であることの重要性である。作者ダンテが、(命令に背いて)「後ろを振り返る者は煉獄の外に戻される」という時、ダンテは後ろを振り返らず、ただひたすら前を、つまり上に位置する地上楽園を目指して進んで欲しいという願望と共に、彼は絶対服従の重要性を説いていると理解されるのである。聖書のロトの話では、後ろを振り返るな、という命令にもかかわらず、振り返ったロトの妻は塩の柱になってしまう。‘But his wife looked back from behind him, and she became a pillar of salt’ 「しかしロトの妻はうしろを顧みたので塩の柱になった」(「創世記」第 19 章 26 節)。神の命令に従わない者は、どのような理由であれ、罰を受けるのである。時にはそれがウザの場合のように、人の目には理不尽なものと見えようとも、そうなのである。ダンテはロトの話を下敷きにしながら、神への絶対的崇拝と帰依

を説こうとしているといえるだろう。

そして、話をドライデンに戻すと、オウィディウスを翻訳しているとき、ダンテを支配した心性と同じ心性が彼を支配していた、といっても過言ではないだろう。ドライデンは、古典的・異教的な要素をよりキリスト教的な文脈に置き換えようとしているのである。

そのようなドライデンの心性は、当然ながら他の箇所においても窺うことができる。それは次のような場面である。山の頂近くに着いたとき、バウキスとピレーモンは振り返り、東屋の近隣が沼地に覆われ、そして彼らの東屋が教会に変わり行くのを見る。その教会に変貌する様は原典では次のように描かれている。

illa uetus dominis etiam casa parua duobus
uertitur in templum; furcas subiere columnae,
stramina flaescent aurataque tecta uidentur
caelataeque fores adopertaque marmore tellus. 699-702.

(その彼ら二人にとってさえ小さかった家は神殿に変貌する。円柱が又木に取って代わり、屋根の藁は黄色になり、屋根は金で覆われるのが見られ、門には彫刻が施され、床は大理石で覆われる。)

furca とは家の破風を支えるフォーク状の柱であろう。これが立派な円柱に変身するのである。屋根の藁は軽くなり金か金色のブロンズに変わる¹⁷。この教会は屋根が黄色であることから想像されるように、古典的・異教的な神殿であることは言を俟たない。しかし、この神殿はドライデンでは以下のように英訳される。

Their little Shed, scarce large enough for Two,
Seems, from the Ground increas'd, in Height and Bulk to grow.

17 William S. Anderson のコメンタリー (p. 398) 参照。

A stately Temple shoots within the Skies,
 The Crotches of their Cot in Columns rise: 160
 The Pavement polish'd Marble they behold,
 The Gates with Sculpture grac'd, the Spires and Tiles of Gold. 157-162.

(下線は筆者)

(彼らの東屋は二人にとってさえ大きくはなかったが、豊かに堅牢になった大地から、高さにおいても大きさにおいても、大きくなるように思われた。天空には堂々たる寺院が屹立し、彼らの東屋の又になっている柱が円柱になって聳え立ち、床は磨き上げられた大理石であるのを彼らは眺め、彫刻を優美に施された門や尖塔や金色のタイル屋根を眺める。)

原文と比較してみると、ドライデンは大筋においては原文に忠実であることが分かる。また、他の古典の翻訳の場合と同様に、先行する翻訳を参考にしていることをカリフォルニア版は教えてくれる。furcas 又になった柱が columnae 円柱に変貌する箇所は、カリフォルニア版も指摘するように、George Sandys の英訳を利用したものであろう¹⁸。しかし、仔細に検討してみれば、またドライデンが微妙に変更した部分にも気づくのである。

顕著な変更点は、ドライデンの描く教会には尖塔 (Spires) ができるのであるが、これに対応する箇所は上にみるまでもなく、原文にはない。つまりドライデンは教会に尖塔を付け加えているのだが、このような加筆によって、古典的な教会からキリスト教の教会に変貌しているのである¹⁹。そして、このよう

18 “To columns crotches grew.” Sandys 訳 VIII, 700.

19 ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) は2種類の「バウキスとピレーモン」の翻訳を残している。どちらの version においても、煙突は尖塔 ‘a Steeple’や尖り屋根をもつ尖塔 ‘a Steeple with a Spire’に変身している。see Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford, Clarendon Press, 1937), pp. 92, 113. このように描かれる教会がキリスト教会であることは明らかであろう。

な変更はドライデンの単なる気まぐれからなされたものでは決してないことはいうまでもないであろう。このようなさり気無い加筆を見落としては、翻訳における彼の意図を見誤ることになるであろう。

5. 結び

オウィディウスの語るピーリトウスは、神々を蔑ろにする荒っぽい気性の人物 (*mentisque ferox* l.613) とされている。この部分をドライデンは ‘He shook his impious Head’ (l.5) と訳している。そしてカリフォルニア版の編者 Dearing 教授は、次のようなキリストの故事から想いついた表現であることを示唆している (p.708)。それはキリストが磔刑に処せられる時のことである。キリストは二人の強盗と共に十字架につけられた。通りかかった者達はキリストを罵った。‘And they that passed by reviled him, wagging their heads.’ 「そこを通りかかった者たちは、頭を振りながら、イエスをののしって」(「マタイによる福音書」第 27 章 39 節) いう²⁰。ドライデンのピーリトウスの描写は、このような不信心なもののたちの描写から想いついたものだろう、という指摘は恐らく正しいだろう。ドライデンは、翻訳の最初からさりげなく読者をキリスト教的な文脈に引き込んでいるのである。

オウィディウスにおいては、ユッピテルとヘルメースを暖かく歓待したバウキスとピレーモンは、自らの東屋が変身したその寺院の宮守となる。そして、二人は年をとり最後には望んだ通りに (そして神が認めた通りに)、同時に死を迎え、一方は榎の木に、他方は菩提樹に変身する。そして、バウキスとピレーモンの変身の話語ったレレクスは次のような言葉で締めくくる。

20 「マルコによる福音書」第 15 章 29 節にも同じ描写がある。

equidem pendentia uidi
 serta super ramos ponensque recentia dixi:
 “cura deum di sunt, et qui coluere coluntur.” 722-724.

(確かに、枝に懸けられている花輪を私は見た、そして新しい（花輪）を懸けながら、私は言った、「神々に愛でられしものが神々になるのであり、そして敬うものは敬まれるのだ」と。)

最後の行に関しては、テキストに問題がある。上記の引用は Oxford Classical Text に拠っている。そしてこのテキストに拠って読めば、最後の行の意味は上の訳文のようになるであろう。しかし、OCT 版が教えるように、最後の行に関しては他の読みも可能であるようだ。例えば、Loeb Classical Library 旧版によれば、次のようになる。‘cura deum di sunt, et, qui coluere, coluntur.’ (724) この読みに従えば、意味は「神々に愛でられしものが神々になるのであり、敬愛するものが敬愛されますように」というほどであろう。また Loeb の新版は次のようである。“Cura deum di sint, et, qui coluere, coluntur.”²¹ (下線は筆者)。ここでは、二つの動詞は直説法から接続法に変わっている。その点に注意して訳せば、「神々に愛でられしものが神々になりますように。そして、敬愛するものが敬愛されますように」ということになるだろう。動詞が接続法に変わること、より穏やかな祈りでこの話は終わるという印象を与えるように思われる。また平井隆氏は 1732 年の Amsterdam 版は、‘Cura pii Dis sunt, e, qui coluere, coluntur’ となっていることを指摘している²²。こうなると、意味は「信心深いものは神々の愛するもので、敬うものは敬われる」となるであろう。このように最後の行に関して、テキストは様々である。しかし、ドライデンがいずれのテキストを使ったにせよ、一つだけ確かなことがあ

21 G.P.Goold によって revised された新版 (3rd Edition) が 1977 年に出版されている。

22 平井隆『17・18 世紀英国ラテン翻訳研究——近代のエピステーメを求めて——』（英宝社、1998 年）、35 頁。

る。それは、神々は複数であることである。deum にせよ di も dis もみな複数の変化形である。神は複数なのである。

さて、このような点を頭に置きながら、ドライデン訳を検討すると興味深いことに気づくのである。ドライデンの訳の最後の部分は以下のように訳されている。

I saw my self the Garlands on their Boughs,	195
And Tablets hung for Gifts of granted Vows;	
And offring fresher up, with pious Pray'r,	
The Good, said I, are <u>God's</u> peculiar Care,	}
And such as honour Heav'n, shall heav'nly Honour share.	
	195-199

(下線は筆者)

(私自身が枝に掛かる花輪を見た、そして叶えられた願いの恩恵に対する感謝の板も。そして私は新しいのを奉げて、敬虔な祈りを込めて言った、「善きもの達は、神が特に愛でられるもので、天を敬うものが天上の名誉に預かるのだ」と。)

カリフォルニア版ドライデン全集第7巻の編者である Dearing 教授はドライデンの 198 - 199 行に関して、ドライデン訳は 1696 年に出版された Oxford 版のテキスト²³を correctly に rendering したものだという。そして注において、オウィディウスのラテン語とその英訳を掲げている。次の如くである。
 “dixi,/ Cura pii Dis sunt, et, qui coluere, coluntur” “I said, the good are the gods' care, and those who honor are honored.” (p. 714, 下線は筆者)
 Dearing 教授はドライデン訳は原典を correctly に rendering したものと評

23 1696 年の Oxford 版とは要するに John Freind が校閲 ‘recensuit’ した the Dauphin (or Delphin) 版のことである。P.Ovidii Nasonis *Metamorphoseon Libri XV... Recensuit Jo.Freind Aedis Christi Alumn.* See Earl Miner & Jennifer Brady, eds., *Literary Transmission and Authority* (Cambridge University Press, 1993), p. 85.

している。しかし、教授は何か重大な誤解をしているのではあるまいか。というのも、仔細に検討するまでもなく、両者の間には重大なといわなければならない相違点が横たわっているからである。原典においては、すでに見たように、神々は複数であった。ところがドライデン訳では神は単数になっているのである。この変更は決して見過ごすことの出来ない変更点である。勿論この変更は意図的であることに多言は要さない。ドライデンは作為了に神を複数から単数に変更しているのである²⁴。そしてその変更にともなって全体がまた大きく変質しているのである。複数である限り、神々はオウィディウスのまた古典的な神々を示していた。ところが、単数に変わることによって、その神は一神教の神となるのである。そしてその神とはキリスト教の神であることは言うを俟たない。

ドライデンはオウィディウスの古典的な、神の力の偉大さを例証する、パウキスとピレーモンの変身の物語を英訳しながら、同時に、その異教の物語をキリスト教の物語に変身・変質させたといえるであろう。つまり、パウキスとピレーモンはキリスト教的な背景をともなってキリスト教の教訓物語に変質したのである。「ルカによる福音書」第9章62節には次のような言葉がある。‘And Jesus said unto him, No man, having put his hand to the plough, and looking back, is fit for the kingdom of God.’「イエスは言われた、手をすきにかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくないものである。」ドライデンは、パウキスとピレーモンを神の国に入るに相応しい者に仕立て上げたといえるであろう。その神の国とは当然ながらキリスト教のそれである。パウキスとピレーモンは、ロトの妻ともまた、ウザとも違って、神の絶対的な命令

24 ドライデンは度々 George Sandys の訳を利用したが、最後の行に関しては見向きもしない。それは Sandys が原典通りに神を複数としていることに一因があるかもしれない。

And hanging fresher, said; Who Gods before

Receiv'd, be such: adorers, we adore. Sandys, p. 281.

に服する者であった。山に逃げるバウキスとピレーモンに対して、「後ろを振り返ってはならない」という一句を付け加えさせた原因は、このような聖書的な背景のもとになされたのである。ドライデンが付加した、原作にはない‘nor once look backward in your Flight’という神の命令は、そのような変質を完全なものとするに寄与しているのであるといえるだろう。